

献辞

—志保田 務 先生を送る—

谷 口 照 三

志保田 務 先生は、本年3月をもって定年退職される。定めとは言え寂しい思いがする。しかし、30年もの永きに亘り桃山学院大学のためにご苦労頂いたことに、心から感謝申し上げ、慶んでお送りするのも我々後輩の務めであろう。先生は、定年退職の特集号に、経営学研究科博士後期課程の開設に合わせて発足した環太平洋圏経営研究学会の機関誌『環太平洋圏経営研究』を指定された。この学会は、地域社会に開かれた初めての、他に類を見ない学内学会である。その機関誌での志保田先生退職記念号の発刊は、図書館学を通し、桃山学院大学のみならず、多様な形で地域社会に貢献されている先生に、誠に相応しいことである。また、そのことは、我々にとっても大変喜ばしいことである。さらに、私事ではあるが、図らずも、先生から直接献辞を依頼されたことは、大変名誉なことである。身に余る思いがする。

私は、1982年に本学経営学部へ赴任した。志保田先生とは当時学部は異なったが、合同教授会であったこともあり、その時から今日に至るまで、多々失礼があったにも拘わらず、誠に忍耐強く、親しく接して頂いている。これまでの期間の前半は、主として教員組合の活動を通して親しくさせて頂いた。その後、先生が主宰されている研究会にもお誘い頂くようになった。私にとって、大変光栄なことであった。今でもその喜びを鮮明に覚えている。志保田先生は、2002年4月より文学部から経営学部へ転籍された。その後は、言葉通り、公私に亘り大変お世話になっている。この頃より、研究プロジェクトも一緒にやるようになり、また2006年4月より約1年半、先生が委員長を務められている国庫助成委員会で御一緒し、大変有意義で楽しい時間を過ごすことが出来た。本当に密度の濃いお付き合いを頂き、感謝に堪えない。私は、学部生と大学院生の時、二つの大学図書館でアルバイトをしていた。このこともあり、私は、志保田先生と元々縁があったのだ、と勝手に思っている。志保田先生、先生から一方ならぬ御高誼を賜りましたことに、心より深く御礼申し上げます。

志保田先生の研究室や私的な仕事場にお伺いした時、大変興味を覚えたことが一つある。それは、部屋にコンピュータが何台もごろごろしており、また増設機器や各種ソフトも沢山あったことである。上述のように、学生時代図書館でアルバイトをしていたにも拘らず、当時は図書館学とコンピュータの結び付きに思いが至らなかった。大変不思議な感覚であった。実は、

私は、高校を卒業し、大学に入る前の約3年間程ある会社に勤めていたことがある。大学に入る直前まで、その会社でニアック1240というビジネス・コンピュータを使って機械語（数字のみ）で用役管理のためのプログラムを組んでいた。このようなこともあり、先生と私は気が合うのではないかと、とまた勝手に志保田先生に興味を持った次第である。一般に、コンピュータに関心がある人はアナログ思考よりもデジタル思考に親和的である、と言われていた。しかし、先生の思考と行動に親しく接したことがある者にとって、このような考え方の信憑性は怪しくなってくる。多くの問題を「ホワイト・アンド・ブラック・プロブレム」にすることなく、常に異なるもの間のベクトルを模索されていることが、志保田先生の思考や行動から窺い知ることが出来る。それは、分類することを通して体系づけて行く図書館事業を研究の対象にされていることから、来るのであろうか。おそらく、それも関係しているであろうが、それは先生の本性によるものではないかと思われる。あの歌唱力を思い起こすならば、おそらく納得出来るであろう。

いま一つ、先生から学びたいと思うのだが、なかなか真似が出来ない点がある。それは、人をうまく育てられていることである。志保田先生は、実に永く本学や他の大学における図書館司書講習に携われてこられた。本学の職員の中にも、多くの教え子がおられる。また、幾つかの研究会でも多くの若い人が集まり、その人たちの顔は希望に満ちており、生き生きとしている。何度羨ましく思ったことか。「倫理とその教育」に関して、アップル・セオリーとバレル・セオリーの対比がよく話題になる。前者は、リンゴ箱に腐ったリンゴが一つでもあれば全部腐ってしまうという事実を前提に、腐ったリンゴを取り除くために、あるいは腐らないようにするために、教育の必要性を主張する。後者は、樽とワインの関係のメタファー（暗喩）として倫理教育について語り、実践する立場である。人間はワインと同様に自ら熟成して行く。ただし、一定の環境条件が必要である。ワインに対して樽がそのような条件を提供しているのと同様に、個々の人々のために教育者、管理者および組織は樽の役割を果たすことが肝要である。それ以上の余計なことはしない方がよい。今、企業において倫理教育が精力的に実践されているが、ほとんどアップル・セオリーから脱却出来ていない。私も、理論的立場ではバレル・セオリーを強力に説いているが、実践面でアップル・セオリーを克服出来ているかどうか、甚だ心許ない。志保田先生は、教育の実践において、また我々後輩と接して下さる時、ここで言うバレル・セオリーの立場に立ち、それを実践されているように思われる。我々が学ばなければならない、最も重要な点である、と言わなければならない。

志保田先生には、世界を教え子で埋め尽くしたいと思われているのではないかと、人々の感覚を刺激するようなどころがある。少なくとも理念的には、限りなく漸進的に、そこに向かっておられるようにも思われる。これから、大学という「檻」から脱出し、自由に飛翔されるはずだから、それは真実味を帯びてくる。志保田先生、まだまだ瑞々しい泉のような心で、なお

一層御活躍されることを、心よりお祈り申し上げます。先生には、多くのものを与えて頂きました。本当にありがとうございました。しかし、我々後輩をまだまだ末永く導いて下さい。